

編集後記

本号は、特集、論説、倫理学講義、書評、活動報告から成る。順次簡単に解説を試みよう。

特集は、社会倫理研究所第一種研究所員であるシーゲルがおよそ二年前から準備してきた二〇〇五年九月実施予定のワークショップの準備の一環として、研究所が開催してきた懇話会での報告に基づいて、本冊子のために纏められたものである。本号にすべてを収録している訳ではない。従って、次号においても、その続編が予定されている。詳しい経緯は、「特集 公正と平和を求める研究プロジェクト」の冒頭に寄せられたマイケル・シーゲルによる「趣旨説明」を一読されたい。シーゲル所員の発案に賛同された国際関係論、国際法、平和学、人権論などに関する研究活動に従事しておられる方々で九月開催ワークショップ報告参加予定者の四名を先ず本号に掲載することができた。

山田哲也先生は、国際連合を中心とする国際

政治の行政部門の現場を熟知しておられる研究者で、今回はとくに「武力行使を巡る問題」に照準を当てて報告を纏めて下さった。ややもすれば「現実を踏まえない理想」に傾斜しがちな中において、学問的基盤を踏まえて「理想を視座に組み込んだ現実」を語ることは困難であることに思いを致すときに益々有り難い論考である。

竹中千春先生の論考は、我々が見過ごしがちな世界のあり方について、又、「暴力の構図」がどのようにして生み出され、どのようにそれが連鎖反応を更に生み出していくのか、そしてどのようにしてその「暴力の連鎖」を解いていけば良いのかについて論ずるが、その説くところは示唆に富む。

中山俊宏先生の論考は、日本の学界では或いは無自覚的に軽視されてきていた現実に光を当て、アメリカの保守化への推移を極めて明快に描写している。リベラルというアカデミック・インテレクチュアル(リベラル・エスタブリッシュメント)とは活動領域及び活動戦略において一線を劃しつつ現実の政治社会の中でのデイスコースを変える(牛耳る)という「ムーヴメント・インテレクチュアル」を自認してその実現

に成功した保守派を跡付けている。

これに対して、羽後静子先生の論考は、ネオグラムシアンとしてヘゲモニー論の観点から七〇年代以降のアメリカの国際政治での動きについて、従来の国際政治学とは全く異なる解釈を提示する。立脚地は異なれども、中山論文と併読されるならば、ここ数十年の米国が取ってきたたかな戦略が浮かび上がってくるようにも思われる。

尚、以上四篇は何れも講演を基にこのたび活字化されたものであり、それぞれの報告時期に時期的懸隔が見られるので、その点は活動報告の当該記載箇所を参照されたい。

論説は、第一種研究所員の山田が大学院に進んでから主として研究の柱として取り組んできたヨハネス・メスナーの生涯と著作について纏めたものである。二十世紀における最も傑出した伝統的自然法論者でカトリック司祭でもあった社会倫理学者の横顔が少しでも知られる機縁となるならば幸いである。

倫理学講義のコナーは、山田晶先生の南山大学での講義ノートに由来する。編集者の一人である山田は、この学期の講義に出席することができた。受講者は数名。今回校正作業にあた

り、当時走り書きしていたノートにより解説困難な箇所が判明するということもあった。ここで特筆しておきたいのは、山田晶先生の倫理学講義を『社会と倫理』に収載するに当って、当初桜井健吾教授（『社会と倫理』第十一・十二合併号、一二〇頁参照）が尽力してくださったこと、そして、その後、山田晶先生の講義原稿を公刊するに際して毎回常に、蒔苗暢夫先生（現在京都ノートルダム女子大学人間文化学部教授）が全面的協力を厭われなかったことである。ここに研究所の名において、蒔苗先生に心から感謝の念を表す。

書評コーナーでは、まず第一に、松田純先生が前年度懇話会にてご報告下さった折に、先生の近刊著について下書きしておいたものを、（字句の一部修正を施したものの）ほぼ原型のまま公表している。山田はヨーロッパの伝統的な議論様式に馴染んでいないためか、著者の論調に違和感をもつことなくその主張をしつくりと受け止めることができた。

二つ目の書評は、シーゲル所員の近刊著『福音と社会』を対象とした山崎裕子先生によるものである。山崎先生には、本号編集日程も最終段階に差し掛かろうとしている矢先での依頼に

も拘らず、多忙を押し、しかも非常に丁寧で適切な記事をお寄せ頂いた。それに相応しい感謝の言葉を知らない。

活動報告については通常編集後記で触れるものではなかるうが、今回は、この三月に南山大学を離れて四月から大阪大学に移籍された小林傳司前所長によつて準備していただいたものを掲載する。この場を借りて、小林先生に謝意を述べておくと同時に、今後とも非常勤その他の仕方で社会倫理研究所の活動にご協力をお願いしたい。

最後に、当研究所は、二〇〇五年度の紀要刊行としては、『社会と倫理』第十八号一冊のみの刊行を予定している。第十九号は二〇〇六年四月に刊行できるよう鋭意努力して既に着手している、そちらもご期待いただきたい。

（奥田太郎・山田秀）